ギャラリー MOS

花 ～もののあはれ～ 下期

安藤由香「伸びる」

『もののあはれ』とは、松阪の偉人、本居宣長が自然・人生の諸相にふれてひき出される優美・繊細・哀愁の理念であると提唱しています。
代表的な句「しき嶋のやまとごゝろを人とはゞ朝日にゝほふ山ざくら花」はまさに一般論としての「大和心」を述べたのではなく、どこまでも宣長自身の心なのです。「日本人である私の心とは、朝日に照り輝く山桜の花の美しさを知る、その麗しさに感動する、そのような心です。」この歌は宣長の心の歌だったのです。
『もののあはれ』を追求し、桜をこよなく愛した本居宣長の地元松阪で「花」をテーマに日本画、油彩画、水彩画、陶板など様々なジャンルの作品を展示いたします。
それぞれの作家の表現する『花』をお楽しみください。見ていただく方の心の機微に触れる作品を届けられる展示でありたいと思っております。ぜひご高覧くださいますようご案内申し上げます。

ギャラリーMOS 松本恵介

2023年11月11日(土)～26日(日) ※木曜休廊

10:00～18:00 ※最終日16:00まで

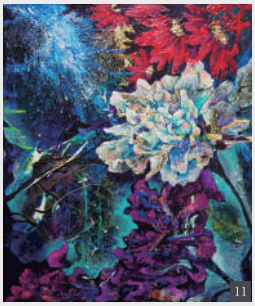
artist

安藤由香
上村光
大島亜弓
北村典子
杉野郁
鈴木靖代
髙田咲恵
田中香里
出口潮
長野聖司
橋本絵里奈
福村飛鳥
宮田佳子

～もののあはれ～ 下期

2023年11月11日(土)～26日(日) 10:00～18:00 ※最終日16:00まで ※木曜休廊

花



1 安藤由香「伸びる」
2 上村光「小瓶とポピー」
3 大島亜弓「凛」
4 北村典子「Mariatheresia」
5 杉野郁「きおくれエチュード」
6 鈴木靖代「届くかな？」
7 髙田咲惠「夕焼ける」
8 田中香里「神託」
9 出口潮「サボテンの花」
10 長野聖司「calming」
11 橋本絵里奈「あの日のぼくら」
12 福村飛鳥「ルリマツリ」
13 宮田佳子「con」

敬称略

「本居宣長四十四歳自画自賛像」
（本居宣長記念館収蔵作品）

物の哀れ （読み）もののあわれ

もの【物】の 哀(あわ)れ

［一］ 物事にふれてひき起こされる感動。多くは「おかし」「おもしろし」などの知的興味やはなやかさの感覚とは違った、しめやかな感情・情緒についていう。

① 人の心を、同情をもって十分に理解できること。人情の機微のわかること。また、その人情、愛情など。
※土左(935頃)承平四年一二月二七日「楫取、もののあはれもしらで〈略〉はやく往なんとて」

② 物事にふれて起こる、しみじみとした回顧の感慨。
※宇津保(970-999頃)内侍督「よろづ物のあはれなむ思ひいでられ、昔の人の声などおもほえ」

③ 物事や季節などによってよび起こされる、しみじみとした情趣。折からの感興。
※拾遺(1005-07頃か)雑下・五一一「春はただ花のひとへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる〈よみ人しらず〉」

④ 何かに深く感動することのできる感じやすい心。情趣や風流を理解し感じとることのできる情緒的教養。
※枕(10C終)一三五「清範、講師にて、説くことはたいと悲しければ、ことにもののあはれ深かるまじき若き人々、みな泣くめり」

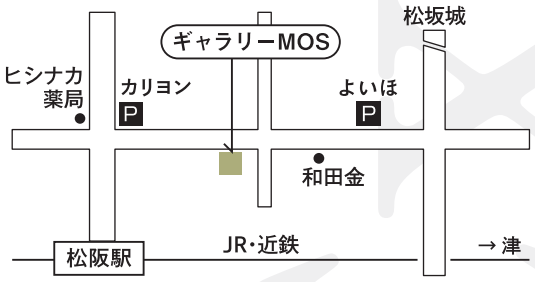
⑤ 悲哀や同情を感じさせるような気の毒なさま。
※浮世草子・好色一代男(1682)四「物(モノ)のあはれをとどめしは、去大名の、北の御方に召つかはれて、日のめもついに、見給はぬ女郎達や、おはした也」

［二］ 本居宣長が提唱した、平安時代の文芸の美的理念。外界である「もの」と、感情を形成する「あわれ」との一致する所に生ずる調和した情趣の世界を理念化したもの。自然・人生の諸相にふれてひき出される優美・繊細・哀愁の理念。その最高の達成が「源氏物語」であると考えた。
※紫文要領(1763)上「これすなはち物語は、物の哀をかきしるしてよむ人に物の哀をしらするといふ物也」

〔補注〕「あはれ」は、古くは感動詞として、喜・怒・哀・楽のすべてにわたって発せられる言葉だったが、「もの」がつくと、「ものあはれ」も「もののあはれ」も、「哀」に限定されるようになる。

出 典 精選版 日本国語大辞典精選版 日本国語大辞典について

オンラインでの展示、販売も同時開催します。
こちらからご覧ください。



■松阪駅西口から徒歩7分

ギャラリー MOS

www.matsumotokamiten.com

松本紙店
〒515-0083 三重県松阪市中町1870 松本紙店2階
TEL:0598-21-0603